

1. 肝硬変における検査前食の有用性についての検討

獨協医科大学越谷病院 消化器内科

香川景政, 鈴木壺知, 安達庄吾, 齊藤浩紀,
片山裕視, 玉野正也

【目的】肝硬変患者に対して, 早朝飢餓状態の改善のため就寝前夜食 (Late evening snack: LES) が用いられるようになってきた. しかし, 肝硬変においては肝癌や食道静脈瘤の確認の検査において, 禁食を強いることが少なくない. そこで我々は, 肝硬変における検査前食の有用性について検討した.

【方法】当院消化器内科に入院中の肝硬変患者 59 名 (男性 34 名, 女性 25 名) を対象とした. 検査前食として 150kcal で BCAA3.2g を含むヘパス II (株式会社クリニコ) と, 200kcal で BCAA 1.63g を含むカロリーメイトゼリー (大塚製薬) を用い, 検査前食を用いない 13 名を対照 (非検査前食群) とした. 腹部 CT 検査, 腹部超音波検査, 上部消化管内視鏡検査日に, 血中遊離脂肪酸 (NEFA) 値, 血清 BTR 値, 血漿 BCAA 値, 血漿チロシン値 (Tyr), 血漿アンモニア値 (NH₃) を早朝空腹時と検査直前 (検査前食服用 3 時間後) に測定した.

【結果】いずれの検査においても, 検査前食による画像に対する影響は認めなかった. 血液生化学検査では検査前食非導入例で NEFA は 636 ± 364 μEq/L から 876 ± 303 μEq/L と有意に (p = 0.0135) 上昇したが, 検査前食群では有意な変化を認めなかった. BCAA は非検査前食群で 451 ± 68 μmol/L から 432 ± 72 μmol/L と有意に (p = 0.0388) 低下したが, 検査前食群では有意な変化を認めなかった. 検査前食間では, カロリーメイトゼリー群で NEFA の低下する傾向と, BCAA と Tyr の有意の (p = 0.0468, p = 0.0003) 低下がみられたが, ヘパス II 群では NEFA と BCAA に有意な変化を認めず, Tyr の有意な (p = 0.0016) 低下を認めるのみであった. また, Child-Pugh A および Child-Pugh B & C 各群において, ヘパス II (150kcal, BCAA3.2g) は血漿 NEFA, BTR, BCAA を低下させなかった.

【結論】検査前食は検査前の禁食による肝硬変患者のエネルギー代謝を悪化させず, エネルギー量として 150kcal 必要であることが明らかとなり, Child-Pugh A では BCAA が 1.63g, Child-Pugh B & C では 3.2g 必要であった.

3. GRO α は大腸癌の浸潤に関与する

¹⁾ 獨協医科大学 第一外科学

²⁾ 獨協医科大学 病理学 (人体分子)

尾形英生¹⁾, 伊藤友一¹⁾, 藤田昌紀¹⁾,
椿 昌裕¹⁾, 市川一仁²⁾, 富田茂樹²⁾,
井村穰二²⁾, 藤盛孝博²⁾, 加藤広行¹⁾,

【目的】GRO α は創傷治癒や血管新生等に関与するケモカインである. 一方, GRO α はメラノーマの増殖を促進する因子として単離され, 前立腺癌, 膀胱癌などで高発現しており, また近年, マイクロアレイ解析により大腸癌において高発現する遺伝子であることが分かってきた. そこで, 本研究では大腸癌における GRO α の発現およびその意義について検討を行った.

【方法】大腸癌手術検体を用いて免疫組織学的に GRO α 発現を調べ, 臨床病理学的因子, 予後との関連を検討した. 次に, 種々の大腸癌細胞株を用いて GRO α , CXCR2 遺伝子発現を RT-PCR を用いて調べた. また, 大腸癌細胞 DLD-1 および LoVo に対して GRO α 蛋白を投与し, 浸潤能に与える影響を invasion chamber を用いて検討した.

【結果】大腸癌組織において GRO α は高率に発現が増強しており, 癌の進行度, 予後と相関した. また, GRO α 遺伝子は検討した 10 種の大腸癌細胞株中 6 種で発現を認め, CXCR2 遺伝子は全種で発現を認めた. GRO α 蛋白は大腸癌細胞 DLD-1 および LoVo に対して浸潤能を増強させた.

【結論】GRO α は大腸癌の浸潤に関与している可能性が示唆された.